



傘の出番

NHK 朝ドラの「おかえりモネ」が完結しました。主題歌を担当していたのは千葉県が生んだ偉大なるバンド「BUMP OF CHICKEN」です。その中の歌詞に「失くせない記憶は傘のように、カバンの中で出番を待つ」という一節があります。ボーカルで作詞・作曲の藤原基央さんは、このドラマの最終回までの世界観を見事に表現していると思いました。

さて日常の話になると、私も折り畳み傘をカバンに入れて持ち歩いています。でもそれをいつも意識している訳ではありません。急に雨が降り出した時に「ああ、持っていて良かった！」となる訳です。入試直前になると、受験生には毎年「持ち物リスト」を渡して準備に漏れはないかを確認してもらっています。さらに予備の消しゴムとマスクも持っていくことをアドバイスしています。

ところで、出番を待つ記憶はいろいろな場面で活用できます。大学入試の小論文や英検3級以上のライティングで“自分の考えを述べなさい”という設問になかなか書けないで固まってしまう人が多くいます。その場合、与えられたテーマに対して自分が頭の中に持っているカバンからどんな経験や感覚を言葉として引き出すかがポイント。要するに記憶にある具体例でふくらませていけばいいのです。それが結局は自分の考えなのです。これは日頃の勉強にも通じることです。例えば中1の地理で「プランテーション＝大農園」を習います。その用語を定期テスト前に目で追って覚えているだけなら、テストが終われば頭の中からはすっかり消えてしまうでしょう。それに対してちょっと引っかかりを感じて「どれくらいの広さで、どんな作物を育てていて、何人くらいの人たちが働いているのだろう」と教科書をじっくり読んだり資料集を見てみたりすれば、頭のカバンの中で出番を待つ言葉になってきます。それが中3になって入試に出てきたとしたら、出番を待っていたかもあります。深い学びとまでは言わないにしても、一步踏み込んで知識を蓄える習慣をつけると傘の本数も増えてくるのではないのでしょうか。